

半井本『保元物語』における〈骨肉相剋〉の問題点

平 野 さ つ き

はじめに

保元の乱が骨肉相剋のドラマであったことは改めて言うまでもない事実である。天皇家と摂関家の家督相続をめぐる内部対立に端を発した乱であってみれば、骨肉相剋はむしろ保元の乱の基本的特質、根幹の部分と言ってもよい。乱に巻きこまれた武士階級も同様な分裂をしており、骨肉相剋は乱に関与した全ての階級に共通の問題にもなっている。だから、日下力氏が「保元物語の方法」^{〔1〕}で作品の三大構想の一つとして、〈骨肉相剋の悲話の創造〉をあげたのは首肯されることなのである。氏は主として作品の結び（末尾文）と、長男に殺される父を描く『為義最期』の分析を通して自説を展開されるのであり、特に一連のドラマのクライマックスとも言うべき為義父子の悲劇についての論は説得力に富む。しかし、為義の場合を別にすれば、『保元物語』は〈骨肉相剋〉そのものないしは、それがもたらす悲劇を必ずしも十全に描いていないのではないか。そしてその理由は何なのか。本稿では

この素朴な疑問について試論を述べてみたいと思う。

（一）

まず、半井本『保元物語』^{〔2〕}の結びから再確認してみる。

保元ノ乱ニコソ、親ノ頸ヲ切ケル子モ有ケレ、伯父方頸切甥モアレ、兄ヲ流ス弟モアレ、思ニ身を投ル女性モアレ、是コソ日本ノ不思議也シ事共ナリ。

結語についての諸本差や内容分析は既に発表済み^{〔3〕}なので、ここでは半井本に絞って見ていくことにする。ここに列挙されたものは、義朝による父為義の処刑、清盛による伯父忠正の処刑、後白河天皇による兄崇徳院の配流、子を処刑された悲嘆による為義北の方の入水の四つであるが、これらはいずれも家族秩序の下剋上の乱れであり、処刑・遠流・自殺という衝撃の結果を招来した事件である。日下氏はこれらを「骨肉相剋の戦いによって惹き起された

悲劇」とまとめ、主上と上皇の王権闘争が「兄弟」の対決という視座から捉え直されていることに注目している。それは確かにそうなのだが、私はむしろ天皇家の争いが書かれている順番や、摂関家の悲劇への言及がないこと、北の方の入水がとり上げられていることなどに注目したい。

天皇家の内部対立は保元の乱の中核部分である。なのになぜ三番目なのか。それは、兄弟であり遠流だからであろう。結語の部分に限って言えば、家族秩序の規制が大きい順に父子―伯父甥―兄弟と並べられているのである。北の方の入水は、「思ひ」が原因としてあげられているのみで、これだけではここに並べられる必然性が希薄であるが、子どもの死が親を死に追いやるという「逆縁」の意味と、もう一つの処刑―遠流―自殺のラインで、ここに配されたものであろう。つまり、「不思議」と評されるのは結果の衝撃であって、衝撃度の高い順に並べれば、天皇家は武士たちのそれに及ばない、というわけである。しかし、本文を読んできた者にとっては、もともと仲の悪かった伯父を「和議ニ構テ」計画的に処刑した清盛よりも天皇家の悲劇が下位に記されるのは納得のいかないことであろう。結果のみに注目する抽出のしかたが、このような順番をもたらしているのである。

摂関家への言及が欠落しているのも同様の理由による。忠実の蟄居・頼長の横死・頼長の子息たちの遠流と悲劇には事欠かないのに、摂関家にふれる文言がないのは、摂関家の内部に直接肉親を手にかけた者がおらず、まして家族秩序をくつがえす形で肉親を悲劇に追い込んだ者が見当たらないからである。頼長は明らか

に僭上的な行為をして家族秩序を乱してはいるが、兄忠通はそのことで悲惨な末路を迎えたりはしていない。つまり、結語のようなくくり方をする、摂関家の悲劇はすっぱりと抜け落ちてしまふのである。

結語で改めてまとめられた保元の乱の特質は、このように衝撃的な結果の部分に限って、しかも下剋上の相剋の面のみを強調したものである。ここでとり上げられているのは、〈骨肉相剋〉のごく一部にすぎず、わかり易いかもしれないが不正確なものである。〈骨肉相剋〉は、むしろ過程として存在するドラマであるし、必ずしも下剋上の形をとるとは限らないからである。

皇室の内紛を兄弟の対決と描くことは、王権闘争を家族の視座で捉え直すという点でも重要だが、父を消去する点でも重要なのである。そもそも、後白河天皇と崇徳院の庄礫の原因をつくったのは、父である鳥羽上皇である。皇位継承者決定権を乱用して、寵妃所生の三才の皇子を強引に即位させ、とりたてて失政もない二十五歳の崇徳を退位させた上、その血統が皇位に即くことを阻むという陰險なやり方をした結果、鳥羽上皇の死と共に崇徳院の不満が爆発したのが乱の本質であって、後白河天皇は立場上乱に巻き込まれて戦後処理を行ったにすぎないのである。作品の中に鳥羽上皇の失政を陰蔽しようとする意志が働いていることは既に指摘されているが、結語にもそれが言えるのである。しかし、王権を守るためであれ、理想の名君として鳥羽上皇を造型するためであれ、乱の根源の父を兄弟とすりかえてしまったのは、〈骨肉相剋〉の描き方とも密接につながる大きな変化なのである。

摂関家の場合も、内紛の中心には父忠実がいた。白河院との対立を引きずって、親子ほども年の差のある長男忠通と次男頼長の仲を自ら決裂させ、それを社会に公表し、結果的には摂関家の權力を大幅に削減してしまったのは他ならぬ父であった。つまり、最初に述べた乱の根幹となる「骨肉相剋」は、父を起点とする形のものであったわけで、この父を起点とする展開がきちんと描かれていないことが、『保元物語』の「骨肉相剋」のドラマの最大の欠点といえるのではなからうか。

結語の最期に北の方の入水が付されているのも、うがった見方をすれば、本能的である分普遍的で説明のいらぬ母子の悲劇へと読者の関心をそらせていく目的があるようにも思われる。それは確かに「骨肉相剋」を悲話へとつなげる一番てっとり早い方法ではあろう。しかし、天皇家や摂関家の場合も含めて、正当的なやり方で「骨肉相剋」と悲話がつながるためには、「愛しあっている者同士が、引き裂かれざるを得なかつた」という形が要求される。骨肉ならでは本能的な部分における「て、いる」と、社会的な状況を含んでの「ざるを得なかつた」が両方描かれる必要があるのである。この点、『保元物語』は「愛すべき者が引き裂かれた」という状況を描くのに終始している。骨肉の恩愛は当然の前提として処理され、父は描かれず、結果のみが記される。唯一の例外は為義父子で、この部分ではじめて骨肉相剋の悲劇は描かれたといえるのである。

(二)

『保元物語』には、わが子への愛情をほとばしらせて行動する父親は為義以外には登場しないが、観念的な父はむしろ多出している。次にその点を見ておきたいと思う。

まず天皇家の場合、近衛帝即位の部分は次のように記されている。

(A) 先帝(崇徳) コトナル御ツ、ガモ渡ラセ給ハヌニ、ヲシヤロシ奉ラセ給フコソ浅増ケレ。カ、リケレバ、御恨ノ残リケルニヤ、一院新院父子ノ御中、不快ト聞ヘシ。(上、後白河院御即位ノ事)

院同士による覇権争いは、傍線部のように、父子の対立としてとらえられている。そして、その対立は「御中不快」という、抽象的かつ多分に感情的な表現で片づけられてしまうのである。崇徳院側からの述懐では、同じ事が、

(B) 昔ヨリシテ、位ヲウケツギ、父譲ヲ得事ハ、嫡庶ニヨラズ、器量ヲモ撰ビ、外戚ノ安否ヲモ尋ラル、ニ、是ハ、当腹ノ寵愛ト云計ニテ、近衛院ニ位ヲ押取レ、恨フカクシテ過シ程ニ(上、新院御謀反思シ召シ立ツ事)

と表現されている。ここでも、皇位継承を「父譲」と、父親

(帝)の権限による子への譲渡、つまり家内部の問題としてとらえていることがわかる。このように、家内部の問題と規定されてしまうと、家の外からは言及できない、言及してもしかたのないことになってしまう。逆にいえば、全権をゆだねられた父の責任は重いことになるのだが、本人の器量と、外戚の家柄を考慮して慎重に選ぶべきところを、当腹(Ⅱ現在の寵妃所生の子)がかわいいというだけで横車を押した、とその無責任さが非難されているわけである。作品の冒頭でその治世を賞讃される名君であつてみれば、鳥羽院が自分の責任に無自覚であつたとは思われぬ。とすれば、責任を忘れさせるほどの情愛が近衛帝と生母美福門院に注がれたはずであり、そこに鳥羽院の苦悩があつたはずなのであるが、それは一切描かれない。生身の父としての鳥羽院は描かれないのである。もちろん、『古事談』や『今鏡』などによって知られる、崇徳院と鳥羽院の感情的・政治的対立なども『保元物語』には一切記されないのである。

皇位継承に関しては、『保元物語』でも別のところでは内大臣藤原(徳大寺)実能に「サスガ天子ノ御運ハ凡夫ノ兎角思ニヨルベカラズ。伊勢太神宮、正八幡宮ノ御計也」と、神意に基づくものであることを言わせているし、『愚管抄』四で、近衛帝崩御後の人選を諮問された忠通が、「イカニモく君ノ御事ハ人臣ノハカライニ候ハズ。タゞ叡慮ニアルベシ」と断るのを、鳥羽院が「タゞハカラワセ給へ。コノ御返事ヲ大神宮ノ仰ト思候ハンズルナリ」と強いて答申させたとある記事からしても、それが当時の共通認識であつたと思われる。また、「父譲」が問題となるのは、

むしろ摂政や氏長者の地位をめぐる当時の摂関家の状況であつたと思われる。保安元(一一二〇)年十一月、泰子の入内をめぐるトラブルから関白忠実が勅勘を蒙り、かわつて当時内大臣であつた忠通が摂政に任命されることになった。『愚管抄』によれば、忠通は受諾の条件として一日父の閉門を解くことを要求、その理由が「代々ノ例コノ職ハ父ノユヅリヲエ候テウケトリ候」故であつた。一応勅定によつて任命される摂関の地位も、通例としては家内相伝の形式を踏んでいたのである。まして氏長者については、この意識が一層明確で、忠実が忠通から藤氏長者の地位を迫害した時の理屈は、「摂政者天子所授、我不得奪之、氏長者我所譲、無有勅宣、然則、取長者官授爾(頼長、何有怖憚)矣」(『台記』久安六年九月廿六日条)というものであつた。保元の乱直後、忠通が宣旨に依つて氏長者に再任されて以来摂関家の相伝の力は衰微していくのであるが、いずれにせよこの時期、摂関家の自意識を代表する言葉として「父ノ譲」は重要な意味をもつていたと考えられるのである。したがつて、皇位継承を「父譲」と表現することは、摂関家と共通の認識に天皇家をおくことでもあるのである。

次に摂関家の場合はどうか。頼長のすぐれた人となりを紹介する文章の前後には、「入道殿(忠実)、御子達ノ御中ニコトニ御余惜クラボシメシケル御子也」・「父ノ禪定殿下モ大事ノ人ニ思タテマツリキ」とあつて、忠実の頼長への思いが極めて客観的に語られている。そして、すぐに久安六年の氏長者移譲事件(Ⅱこれこそ摂関家の骨肉相剋のものになった事件)が書かれる

のである。

(C) 久安六年九月廿六日、氏ノ長者ニ補シ、同七年正月十九日、万機ノ内覽ノ宣旨ヲカウブラセ給テ、天下ノ事ヲ知食ス。撰政関白ヲ閣テ、三公タル例、是ゾ始メナル。サレバ、人傾申ケレドモ、父ノ御計ノ上ハ、此大臣トテ世ヲ知シ食スベキニモアラネバ、君モ臣モユルシ奉ラル

父の権限を前面に押し出した事件であるにもかかわらず、ここにはその経過が一切述べられていない。頼長を氏長者とするということが、兄忠通から氏長者の地位を奪うことであるということにさえ言及していない。両方とも自分の子どもでありながら、あえて対立の種をまかざるを得ない忠実の状況は記されないのである。関白忠通をさしおいて、左大臣が内覽の宣旨を受けた異例さから、天皇を始めとして周囲は批判的な視線をなげかけるが、これを封じたのが、「父ノ御計ノ上ハ」という認識であつた。前述のごとく、摂関や氏長者の地位が世襲的なものと考えられ、その継承が摂関家内部の問題とされる傾向があつたとはいえ、制度的にも先例のない関白と内覽の別人による併立までも「ユルス」根拠として、父が機能するのである。この場合の父が肉体を伴う存在でないことは言うまでもない。社会的な問題を家の中にひきずりこみ、密閉することによって、他者からの批判を峻拒する、権威的な存在なのである。

かくして、父忠実の横暴なふるまいは棚上げされたまま追及さ

れず、名のための関白となつた忠通は父に抗議することもしせず、「関白ノ辞表ヲサマルカ、内覽ノ氏ノ長者、関白ニ可付欽、兩様天裁ニアリ」と天皇への直訴に及んで、弟頼長と兄弟の「御中不快」の状況になっていくのである。(一)で結語の天皇家についての表現でみられたのと同様のすりかえがここにも見られるわけである。

(B)(C)の用例に端的にみられるように、父はまずもつて権威であつた。これは、乱後に勲功賞に対する不満を述べる義朝の

(D) 勅命背キ難シト云へ共、父ニ向テ弓ヲ引、矢ヲ放テバ、人ニ越タル不次ノ賞ヲコソ蒙候ベキニ (中 武士ニ勸實行ハル

事)

という発言における父にも共通している。父は絶対的存在であつた。源家の場合には、この父が敗者となり朝敵となることで、肉体を有する存在に変化し得たわけだが、天皇家と摂関家の場合は、遂にこの観念的父の枠を抜け出せなかつたのである。

(三)

乱の前に他界してしまつた鳥羽院は一まずおいて、摂関家の〈骨肉相剋の悲話〉を忠実を中心に追つてみることにしよう。

頼長を氏長者とし、内覽にしてから合戦が終結するまで、忠実は作品には出てこない。しかし、「院ノ御方ノ軍破ヌト聞給テ」にわかに行動し始める。頼長の行方もつかめぬ内に「アワテ騒

デ」、頼長の三人の子息たちを引きつれて南都へ避難するのである。しかも、その際に①宇治橋を引く、②忠通の子息で僧籍にあった者を襲う、③悪僧らを召して兵力を集めるなど露骨な敵対行為をしたため非難を浴びることになる。

(E)此入道ヲバ、君モ恥奉リ、世ニモ重キ事ニシ奉ツルニ、法性寺殿（忠通）ハ可レ然家嫡ニテ、撰録ヲ請取テ御座ツルヲ差置奉テ、左府ハ末ノ御子ニテ御座ツルヲ引立奉テ、関白ニ付タル内覧ノ氏ノ長者ヲ剃着セ奉ツル事ヲバ、世以テ傾申然共、天子ニモ人臣ニモ、愛子ニ成ヌル上ハ、子細ニ不レ及事ナレバ、思免シ奉ツルニ（中略）又兵ヲ集テ、君ニ立合進セント御支度有由聞テハ、少モ違ヌ二ノ舞哉ト申合ケル。真実ニハ、入道殿、争謀反ノ御企ハ有ベキナレ共、新院ノ御方ニ、我愛子ノ左府ノ参ラセ給ケレバ、内々御心共ノ通事、世ニ被レ知給シカバ、定テ我モ被レ責スラント驚キ給テ、引籠ラセ給ケルナレバ：（中、関白殿本官ニ帰復シ給フ事）

忠実が南都へ移ったのは史実としても確認できるが、『兵範記』によれば、「聞食左府事急令逃向南都給了」とあって、明らかに頼長の動向を耳にしての決断であったと思われる。しかも、『兵範記』はこの直前の部分に「於左府者、已中流矢由多以称申」という記事があつて、頼長負傷のニュースが流れたのをうけての忠実の行動と読みとれるのである。この点、半井本『保元物語』は息子の動向とは無関係に行動を開始しているのが注目さ

れる。

また、忠実非難のある人のことばの中では、再び内覧と氏長者の事件がとり上げられるが、ここでは、「可然家嫡」を「末ノ御子」に越えさせた非を明確に指摘しており、(C)では「父ノ御計」とあつた部分に「愛子ニ成ヌル」を入れて、父の權威を後退させている。忠実は、家内のことについては全權を掌握し、自他共に認められる權威ある父ではなく、子を思ふ道に迷つた凡夫として、半ば同情的にその失策を許される存在ではない。これは、もちろん院方の敗退による忠実の扱いの変化であろうが、同情されるようになった忠実がそのまま悲劇へと進んでいくかといえ、決してそうはならないのである。

波線部bは、作者が忠実の心中を代弁している箇所であるが、ここにも無造作に「我愛子ノ左府」と愛子がくり返して用いられていることは見逃せない。非難の中で、皮肉やとげを含んで用いられた表現をそのまま用いている以上、これを単なる「愛する子」とするのは単純すぎよう。むしろ、かなり自虐的なニュアンスを含んだものの言いであると考えた方がよい。だからこそ、「きつと自分も責められる」と思った彼は、愛息の安否を確認することもせずに、驚きあわてて逃げるのである。

流矢に首を射抜かれて瀕死の状況に陥つた頼長は、「入道殿（忠実）二見ヘ奉リ見奉テ、死ナバヤ」と最期の望みをくり返すばかりになったため、配下は苦心して南都まで運んでいき、忠実に「限ノ御在様ヲモ御覧ゼラルベキ」旨を申し入れるが、「此事、中く見奉ラジ」と忠実は対面を拒否する。

(F) 走出テモ、迎進度思食サレケレ共、余ノ心ウサニ、「何トテ

カ、入道ヲモ見共思ベキ。入道モ見エン共思ヌヲ。ヤレ俊成

ヨ、氏長者タル程ノ人、兵仗ノ前ニ懸ル事ヤ有。サ様ノ不運

ノ者ニ対面セン事 コツナカリナン。目ニモ見ヘズ、音ニモ

聞ヘザラン方ヘ可「行」ト被仰テ、御涙ニ咽バセ給ケリ。実

ニサコソ思食ケメ。承モ悲カリケリ。

俊成走返テ、此様ヲ申ケレバ、左府打ウナツカセ給テ、御

気色替セ給テ、御舌ノ端ヲ食切り、血ヲハキ出サセ給フ。何

ナル御心向共難「心得」。威シカリケリ。(中、左府ノ御最期)

叫びがこめられているような観がある。頼長は以後看護を一切受けつけずに死んでいくのである。

自ら息子の死を早めたともいえる忠実は、頼長の訃報を耳にした時、

(G) サリ共、暫ハ死ナジ物ヲト思テコソ見ザリツルニ、サテハ

死ニケル事ヨ。我膝ノ上ニテ死スベカリケルニ、只今死ニケ

ル者ニ合デ、入道ガ口説事ヲシケルクヤシサヨ哀レ摂政閑白

ヲモシテ、天下ノ事ヲ今一度取行ハンヲ見聞トコソ思シニ、

命ノ長キモ由無事ニテ有ケリ。カ、ル事ヲ見聞ハ(同前)

忠実が後に自ら「口説事」と反省する発言の内容は、地の文に父の愛情を垣間見せながらも、息子が「氏長者」という地位に泥をぬったことへの批判であり、少なくとも「限」の有り様をご覧下さいと言つて来ている使者にすべき答えとは思われない。前述の南都へ逃げた行為をあわせ考えると、そこには保身を図る目的がほの見えるような気がする。いずれにしても、頼長は此の時点で、既に見捨てられてゐる。期待にそえなかった、元愛子ではない。父に愛されているという自負に基づいて、無邪気に父との対面を願つた頼長は、父の意向を耳にするや全てを悟つて、態度を急変させる。才能をこそ愛されたのに、期待にそえなかったという事実を認めながらも、舌を食い切り血を吐き出すという激しい行為をせずにはいられなかった頼長。この意味不明の行動には、自殺や自己嫌悪といった志向よりもっと激しい、絶望と自暴自棄の

と泣いて嘆いたという。波線部に初めて直接的愛情表現がみえるが、遅きに失している。しかも、このあと嘆き続けながらも、忠実は氏長者が矢に当つて死ぬ異例さを問題にし続け、生きてさえいてくれたらと老いのくり言で周囲の同情はかうものの、結局は愛息の死を、「氏長者に至りながら神事仏事を疎かにした報い」という結論へ導いてしまふのである。

確かに『兵範記』や『愚管抄』に頼長と対面しなかった忠実が描かれているのだから、この事実を曲げることは無理かもしれない。しかし、(E)の部分で分析したように、敗戦を機に周囲の評は權威としての父から、凡夫としての父へと変化したのであるから、忠実をこのラインで描くことは可能だったのではないだろうか。

むしろ、そこに徹することが出来れば、普遍的な父親像として為義同様に悲劇の人となれたのではなからうか。だが、忠実の人物

造型は、あくまでも観念的な父の枠の中に設定され、そこからはみ出ることとはなかったのである。このような父である限り、骨肉相剋の実態は描きようがない。頼長への偏愛が生み出していく忠通の中の深い恨み、偏愛が対象を戦いの中で失った時の絶望感——それらは全て、忠実が一介の父親として言動しない限り描けないものである。

四

〈骨肉相剋〉の対極にある表現は、家族愛をいう「恩愛」であろう。「恩愛」という語は、『保元物語』では半井本でも金刀比羅本でもただ一箇所、「為義降参ノ事」に出てくるのみであるが、たとえば半井本の「恩愛ノ道ハ不力及、思切レヌ事ナレバ」といった表現は、『平家物語』などにも類似のものを拾うことができる。つまり、ごく一般的な言いまわし、および概念のレベルでは、「恩愛」は『保元』にも『平家』にも共通して存在する認識であると考えられるのである。特に生物学的な本能に根ざす母子の恩愛については、共通する部分が多い。母親の立場や子を失う状況は全く違っても、為義北の方の悲劇と建礼門院の悲劇は相似した印象を与える。これに対して、『保元物語』における〈骨肉相剋〉の基本となる父子関係・父子の恩愛の具体像となると、両作品にはかなりの隔りがあるように思われる。

『平家物語』においては、父子恩愛を示す寓話は枚挙にいとまがない。その中でも典型は、一の谷の先陣をめぐる熊谷父子や梶原父子、自領にたてこもって義仲に対抗した瀬尾父子の話など、

父親が息子をかばって戦う話であろう。戦いに未熟で、非力ないしは無鉄砲な息子たちを死地から救うために、父親たちは渾身の力をふりしぼって敵陣をかけぬける。また、逆に自分を守って死んだ息子に涙する知盛の話などもある。俊寛や維盛のように遠く離れた子ら进行形のものもある。病に侵された重盛を心配する清盛の姿なども父子恩愛には違いない。これらを見ると、父親と子どもが、ゆるぎない信頼関係と愛情によって結ばれているように描かれていることがわかる。そして、父親が先に死んでしまう成親父子のような特殊なケースを別にして、一貫して父親の視座に立つて描かれているのである。子の方は常に父親を意識しているわけではないが、父親の方は子を守ることに、愛することに對していつも意志的である。しかも、その意志が他の種々の価値感や概念に侵されることなく、純粹に子を感じる情けとして描かれるところにその特色がある。父親は臆面もなく子への思いを口にし、自らの意志に従って思う存分行動していくのである。『保元物語』の、「親ハ子ヲ思ヒ、子ハ親ヲ思ヌ習」という為義の発言にもあるように、親の側からの情愛に主導権があるのが父子恩愛の一般の形であるならば、『平家物語』のごとき描き方は理にかなったものといえよう。つまり、父子恩愛を描く時の鍵は父親なのである。

前述のごとく、『保元物語』ではこの父が観念的枠の中に置かれている。その上、『保元物語』に登場する父子関係は、前提からして歪んでいる。鳥羽院の近衛帝に対する愛にしても、忠実の頼長に対する愛にしても、素直に受け入れられない性質を持つて

いる。つまり、実際に父親が愛した子の他に、より愛すべき子が存在し、情愛そのものを描く前に、何故情愛がそちらに注がれたのかという点について説明しなくてはならない状況があるのである。観念的な権威としての父にこだわる限り、この状況は打開できない。家族秩序や長幼の序によって権威を与えられている立場の者が、自ら長幼の序を乱す形で情愛をほとばしらせていく時、それを説明できる論理などないからである。それを説明し、享受者に納得させるためには、父を弱い凡夫の存在にまで一度ひきずりおとし、人間の愚かさとして描いてみせる必要がある。愚かな情愛が「愛子」の側の父への思いとかみあつて共感を呼び、愛されずに苦しむ子への同情と同等の比重を持った時、「骨肉相剋」は初めて十全に描かれることになるのである。

前提としての父子関係が受け入れられれば、後は愛子が親に先だって死ぬ悲劇と、愛されずに苦しむ子が心ならずも親に敵対していく悲劇を描けばよい。しかし、天皇家の場合も摂関家の場合も、前提が完全でなかったために、近衛帝や頼長の死を嘆く思いも不十分、ましてや崇徳院や忠通の心情に至ってはほとんど描かれておらず、悲劇ははなはだ不明瞭な段階に終始してしまっているのである。つまり、「愛がありながら引き裂かれた」という状況を、引き裂かれた悲劇ではなくて、招来された結果の悲劇から描き、結局愛そのものを描かない形になっているのであり、これは(一)で分析した結語のあり方と通ずるものである。

それでは、源家の悲劇は何故描写に成功したのであるうか。(二)の最後で述べたことの他に考えられることとしては、為義が武家

の棟梁の発想として、家督を譲った長男義朝への信頼と愛情を貫き通したことがあげられる。長男と敵対することになってしまふのは、「院」という権力の意向によるもので、為義の本意ではないし、父を処刑することになる義朝も「勅命」に逆らえずやむを得ず斬る決断をしたとされる。「家族秩序」にこだわるのが、ここでは父親為義の描写に何の規制も与えない。むしろ、実力がありながら父に愛されない末の子為朝の苦悩を表現するのに恰好の材料を提供しているのである。父に「兄弟共ヲ押ノケテ我一人世ニ有トスルエセ物」と不孝されたくない一心で行動を規制していく為朝、信頼しきつた長男に斬られる父、やむを得ず父を斬る義朝、三者三様の悲劇がきちんと記された上で、衝撃的な結果が描かれるわけである。

「父ガ首ヲ刎ル子、子ニ首を被^レ刎父、切モ被^レ斬モ、罪報ノウタテキ事カナシムベシ、く。阿弥陀仏、く。」⁽¹⁴⁾という中世唱導にうってつけの文句につながる源家の話柄が注目を浴びたことが、結語のような枠組みをもたらしした可能性もあるが、それは断言できない。ただ、家族秩序や結果にこだわるという枠が父の描き方に規制を与え、天皇家や摂関家の「骨肉相剋」——すなわち保元の乱の根幹——を見えにくくものにしてしまったということはいえるように思う。

注(1) 『講座日本文学平家物語上』(至文堂「解釈と鑑賞別冊」昭53・

3)。

(2) テキストには岩波の新古典文学大系所収のものを用いる。

- (3) 『保元物語』の結語について(『古典遺産41』平3・2)。
- (4) 平野「半井本『保元物語』における王権の問題」(『国文学研究103』平3・3)、野中哲照「保元物語」における(鳥羽院聖代)の演出——美福門院の機能をめぐって——(『国文学研究113』平6・6)。
- (5) 第二・臣節「鳥羽院、崇徳院ヲ夷子トシテ遇セザル事」。
- (6) すべらぎの中「第二・鳥羽の御賀」。
- (7) 上「内府意見ノ事」。
- (8) 巻四。
- (9) 保元元年七月十一日条。

新刊紹介

加美 宏著

『太平記の受容と変容』

本書は『太平記』の受容史・影響に関わる論考を中心に、著者の近年の研究成果を収録したものである。第一章では『太平記』概、第二章では『太平記』の受容や評価の史的変遷に関する展望が述べられ、続く三つの章では数多くの注釈・評判書等をもとに、『太平記』の受容に関して細かな分析、考察がなされている。付章でも『太平記』受容史に深い関わりを持つ人物が取りあげられており、著者の一貫した問題意識が窺える。受容の考察を通し、『太平記』の文学的特質をとらえ、その文学史的位置を見定める」とあとがきに記されるが、その言葉通り、後世に多大な影響を与えた『太平記』の文学性を再認識させられる一冊である。

- (10) 『兵範記』保元元年七月廿一日条には、「先申、事由於入道殿、依不_二知食_一」とあり、『愚管抄』には「入道殿ニ申ケレバ、今一度」トモヲホセラレザリケリ。」とある。
- (11) 例えば巻十「維盛入水」の「恩愛の道はちからおよばぬ事也。」(寛)など。
- (12) 下「為義最後ノ事」。
- (13) 平野「半井本『保元物語』における為朝について——『孝子的側面』の本質を中心に——」(『軍記と語り物26』平2・3)参照。
- (14) 下「左府ノ君達并ビニ謀反人各遠流ノ事」。

なお、本書には大阪府立中之島図書館本『楠氏二先生全書』の翻刻が付載されている。この作品は『理尽抄』に拠るところが多いと評されており、今後『太平記』受容の様相を考察する上で、価値ある資料が提供されたといえるだろう。

(平9・2 翰林書房 A5判 四八六頁 一五〇〇〇円) (田中尚子)

復本一 郎著

『入門 芭蕉の読み方』

本書の書下ろしの経緯は「あとがき」に述べられており、以前に刊行された著者の『芭蕉俳句16のキーワード』が、そのきっかけとなった由。その前著はあくまで俳論にこだわった書であったが、これに対し本書は「俳論を少し離れて、芭蕉の魅力が多視点から存分に書いてみよう」、「一人の芭蕉ファンである筆者の私が、私なりに考えた芭蕉

の魅力をも、多くの芭蕉ファンに語りかけてみよう」(「あとがき」)との意図のもとに成った。全体の主要部分は各七章の三つのセクションに分けられ、芭蕉の句文をテーマの中心に据えて執筆された合計21章の「メッセージ」として構成される。この21という数字には来るべき21世紀が意識されているという趣向も心憎い。その項目は、「(生活) 1庵住・2風狂・3乞食・4漂泊・5無智・6持病・7辞世、(俳論) 1感動・2風流・3挨拶・4俳意・5閑寂・6帰俗・7新味、(実作) 1拍子・2眼前・3季詞・4推敲・5切字・6取合・7前書。それぞれ完結しており、読者はいずれからでも自由に読める。また、板本の挿絵など写真も多く添えられ、芭蕉の略年譜も付されるなど、読みやすく工夫が凝らされる。

(平8・10 日本実業出版社 B6判 二二九頁 一三〇〇円) [伊藤善隆]